ラーマーヌジャにおけるアートマンの直証

木　村　文　輝

Ⅰ．Rāmānuja の救済思想によれば，解脱を獲得するためには karma-yoga の実践が必要である。すると，そこに内包されている jñāna-yoga も同時に実践され，それによって行為に関与することなく存在している ātman が瞑想される。そして，その二つの yoga を成就した者は「知識の確立した者 (sthitaprajña)」となり，ātman を直証 (avalokana) する。つまり，身体から離れた ātman の真の姿を明瞭に見るのである (Ⅱ.53)。だがこの時，ātman が有するもう一つの側面，すなわち神の śeṣa (従属者) としての ātman の姿は直証の対象にならない。それは，その後神の真相が直観される時に初めて直証されるものである。

このように，Rāmānuja は ātman の直証を大きく二つの次元に分けている (便宜上，前者の次元を「低次の直証」，後者のそれを「高次の直証」と呼ぶ)。その各々の次元における直証が如何なる特徴を有しており，彼の救済理論の中でどのように位置づけられているのか。本稿は，これらの点を *Bhagavad-gītā* に対する彼の『注釈』にもとづいて考察することを目的とするものである。

Ⅱ．まず始めに，低次の直証を概観しよう。この段階における最も基本的な事柄は，知識を唯一の形態としている ātman の真の姿を直証し，ātman が prakṛti とは別の存在であることを認識すること，すなわち，prakṛti からなる身体を ātman だとみなす迷妄を取り除くことである。

すると，この迷妄の故に prakṛti が生み出していた潜勢力 (vāsanā) が止滅する。潜勢力とは，ātman を身体と結び付けて迷妄を生じさせる原因であるとともに，ātman を行為の実践に駆り立てる原因でもある (Ⅴ.14-15)。それ故，潜勢力が止滅すると，ātman が再び身体と結び付くことも，ātman が行為に執着することもなくなる。その結果，ātman を輪廻に束縛する業 (karman) は新たに生じなくなるのである。

このことは，換言すれば低次の直証を獲得した ātman が，潜勢力を生み出す prakṛti やその構成要素である guṇa との接触を，完全に断ち切ったことを意味している。事実，Rāmānuja 自身もそのことを明記しているのである (XⅣ.20)。

だが，ātman の直証をもたらす karma-yoga は，欲望の原因である rajas と無知蒙昧の原因である tamas とを鎮め，ātman の直証の原因である sattva を増大させるという作用を有するものである(XIV.17-19)。したがって，karma-yoga が成就した時に，ātman は今だ sattva と結び付いているのである。

だとすれば，ātman が guṇa との接触を断つためには，karma-yoga の実践だけでは不十分なはずである。そのために，Rāmānuja は神のもとに庇護を求めるという態度，すなわち prapatti が不可欠であることを後に示している（XIV.26-27)。しかも，彼は別の箇所で，潜勢力の除去と ātman の直証とは，karma-yoga の実践によって喜悦させられた神が，自らの恩寵によって ātman に授けるものであるとも述べている（III.9)。

そこで，以上の事柄を整理すると，次のように理解することができるであろう。すなわち，karma-yoga によって rajas と tamas とが鎮められ，sattva のみが独占的な地位を占めた時，karma-yoga と prapatti とによって喜悦した神が，恩寵によって ātman から一切の guṇa とそれにもとづく潜勢力とを引き離す。すると，prakṛti から離れた ātman の真の姿が直証され，ātman を輪廻の中に束縛する業の支配から，ātman は解放されることになる。その結果，過去世以来積み重ねてきた業を使い果たした後に，その ātman は輪廻から解放されるということが，この時点において既に確実になるのである。

III.　さて，こうして業の支配から解放された ātman は，業の影響を受けないという点において，神との同質性を獲得する（VI.33)。しかも，ātman と神とは完璧な知識を有するという点においても同質である(VI.31)。それ故，低次の直証を獲得した者は，いかなる時であれ，全ての ātman の中に神との同一性を認識することができるようになるのである（VI.31-32)。

だが，その際に神の śeṣa としての ātman の姿が直証されるということは，一切記されていない。のみならず，『注釈』の中で karma-yoga と低次の直証とに関する事柄のみを論じているVI章までの部分や，神を念想せずに「ātman を念想する者」について説いている幾つかの箇所（XII.3-5 等）では，ātman が神の śeṣa という姿を有していることさえも，述べられていないのである。

一方，『注釈』のVII章以降において神の真相が説かれるようになると，ātman が神の śeṣa という姿を有することは繰り返し述べられるようになる。その上，そうした姿の ātman の直証，すなわち高次の直証を行うためには，ātman を自らの śeṣa として有している（śeṣin）神の真相が明瞭に直観されていなければ

ならないことも説かれている（Ⅶ.1-27)。したがって，神の śeṣa としての ātman の直証とは，ātman を自らの śeṣa として有する神の真相の直観だと換言することができるであろう。

また，prakṛti の束縛から完全に解放された状態にある ātman，すなわち低次の直証を達成した ātman は，神の śeṣa であることのみを喜びとする者として瞑想されるべきことが示されている（Ⅷ.22)。これによって，低次の直証の完成は，高次の直証の前提をなしていることが明らかであろう。

更に，神の真相を直観することによって，高次の bhakti の生起を妨げる一切の罪過は取り除かれる（Ⅹ.3)。のみならず，高次の直証を獲得した者は，自らを śeṣa として有している神に対する無上の愛しさを覚え，瞬時たりとも神から離れていることに耐えられないようになる（Ⅶ.18)。故に，彼の中には神に対する高次の bhakti が自ずから生ずることになるのである（Ⅻ.11)。言い換えれば，神の真相の直観とともに生ずる高次の直証は，解脱を獲得するための直接的な手段である高次の bhakti が生起するための原因をなしているのである。

それに対して，低次の直証では śeṣa-śeṣin という ātman と神との関係が全く把握されていない。しかもそこでは，ātman と神とが同一性を有する別々の存在として認識されているにすぎないのである。それ故，高次の bhakti が低次の直証にもとづいて生起することはあり得ない。

だからこそ，低次の直証を行う者を高次の直証を行う者と比較すると，前者は「恰も須弥山と比べた時の辛子種の如く」に劣った者だと述べられる程（Ⅵ.47)，両者の間には決定的な次元の相違が存在するのである。それ故に，Rāmānuja は低次の直証の中に高次のそれを含めることをあえて拒否したのである。

Ⅳ.　では，低次の直証と高次の直証とを隔てている原因は何か。言い換えれば，ātman を śeṣa として有する神の真相を覆い隠しているものは何か。

Rāmānuja によれば，神は「神の本然的な姿の隠蔽」を作用とする māyā を自ら有し，それによって自らの真相を一切の生類の前から隠している(Ⅶ.14)。もっとも，この māyā とは「無明 (avidyā)」を意味するものではなく，直截には guṇa からなる prakṛti のことである (*ibid.*)。したがって，それは潜勢力と同様に，guṇa から構成されたものなのである。しかも，māyā を渡り越えるための手段として示されているのは，低次の直証を獲得する際に，既に不可欠であると説かれていた prapatti に他ならない (*ibid.*)。

それでは，なぜ prapatti によって潜勢力が止滅され，低次の直証が獲得され

た時に，神の真相は同時に直観されないのであろうか。

残念ながら，この点に対する明確な回答を『注釈』の中に求めることはできない。ただし，迷妄をもたらす潜勢力としての guṇa は，ātman 自身が行った行為にもとづいて生じたものである。他方，神の真相を隠している神の māyā としての guṇa は，神が世界の創造を行うために自らの意志に従って生み出したものである（Ⅶ.14)。故に，二つの guṇa は生起の由来をそれぞれ異にしている。そこで，次のような推測を導くことは可能であろう。すなわち，karma-yoga の実践と prapatti とに対する神の恩寵によって，まず前者の guṇa が除去されて低次の直証が成立する。そして，その直証を成就した者に神は新たな恩寵を授け，それによって māyā としての guṇa が除去される。その結果，神の真相が顕現して高次の直証が成立し，更には高次の bhakti も生ずることになるのである。つまり，成立の根拠が異なる二つの guṇa は，それが取り除かれるためにも別々の機会を必要とすると考えることができるのである。

Ⅴ．Rāmānuja によれば，ātman は本来 prakṛti とは別の存在である。だが，無始なる時以来 ātman は prakṛti からなる身体と結び付いている。そのために，身体こそが ātman だという迷妄に陥り，それが原因となって ātman は輪廻の中に束縛されている。それ故，迷妄が払拭された時，輪廻への束縛の原因は消滅する。つまり，prakṛti から完全に離れた ātman の真の姿が直証された時に，その ātman はいずれ輪廻から離脱するという確証を，既に輪廻の中で手に入れるのである。

だが，それのみでは真の解脱，つまり神のもとへの到達を獲得することはできない。何故なら，prakṛti から離れた ātman の姿を直証した者にとって，神の māyā が恩寵によって取り除かれることが次に必要だからである。それによって神の真相を直観し，神の śeṣa としての ātman の姿を直証した者のみが，その時生ずる高次の bhakti によって解脱を獲得できるのである。

このように，ātmanを直証した者は，輪廻の原因と神の真相をくらませる原因から順次解放されることになる。故に，ātman を直証し，高次の bhakti を獲得した者にとって，解脱の妨げは最早存在しないと言うことができるのである。

『注釈』: Rāmānuja's *Bhāṣya* ad *Bhagavad-gītā*, ed. by S.G.S. Sadhale, *The Bhagavad-gītā with Eleven Commentaries*, 2nd ed., Bombay, 1938.

なお，本文中における（　）内の番号は，同書における箇所を示している。

〈キーワード〉 Rāmānuja, ātman の直証, vāsanā, māyā
（名古屋大学大学院）